内閣総理大臣賞

命を救ってくれた「思いやりの資金」

大田原市立黒羽中学校

３年　高橋　咲愛

「川崎病」という病気をご存じだろうか。突然の高熱や全身の発疹などが引き起こされる、乳幼児に多い原因不明の病気だ。私はこの病気に２度もかかった。いずれも長期間の入院治療を余儀なくされたが、幼かったため当時の記憶はほとんど残っていない。かすかに覚えているのは、何度も注射をされたことや病室で絵本を読んでもらったこと、そして退院時に家族が退院パーティーを開いてくれたことくらいだ。私にとってそれはどこか温かく、断片的な思い出に過ぎなかった。

ある日、母に当時の話を聞くと母は「さなが注射されるとき、大声で泣き叫んだことが本当に辛かった」と当時の苦労を教えてくれた。更に母からは「２度目の入院時、治療費がいくらになるのかという不安もあった」という現実的な話も飛び出した。川崎病の治療には高額な薬や検査が必要だが、２度も続いたのだ。しかし結果として、窓口での支払いはごくわずかだったそうだ。「子ども医療費助成制度」があったから、お金の心配をせず看病に集中できたとしみじみ振り返っていた。この母の言葉が、租税教室で習った税金の知識と結び付いた。先生は納められた税金が医療や福祉など、社会のあらゆる仕組みに使われていると教えてくださった。その瞬間、私はハッとした。私が３、４歳の時、お金の心配なく治療を受け、今もこうして元気に生きられているのは決して当たり前ではなかったのだ。調べてみると、税金には私の命を救ってくれた医療費助成の他にも、様々な種類と重要な役割がある。身近な消費税や所得税などは、学校の教科書や机、命を守る警察や消防といった公共サービスを支える財源になっている。もし税金がなければ誰もが安心して暮らせる社会は成り立たない。つまり、税金とは単なる国の収入ではなく、私たちが社会全体で支え合って生きていくための思いやりの資金なのだ。それまで、税金とは自分のお金を減らすだけの存在だと思っていた。しかし、それは大きな間違いだった。税金の最大の意義は、誰かが病気や予期せぬ危機に陥った時、社会全体で手を差し延べ合い、互いを守り合う助け合いの仕組みにある。幼い私の命と家族の日常は、日本中の見ず知らずの大人たちが納めてくれた税金という名の優しさによって、２度も裏から守られていたのだ。心に残るあの温かい退院パーティーの思い出も、元を辿れば社会に溢れる思いやりの資金に支えられていたことに気付かされた。

２度も税金に命を救われ、家族の笑顔を繋いでもらった私は、この恩を次の世代へと繋いでいく責任がある。これからも学び続ける姿勢を大切にし、将来はしっかりと税金を納める大人になりたい。そして今度は私が、病気に苦しんでいる小さな子どもたちの命や不安を抱える家族の日常を支える番だ。目に見えない税金という絆に感謝しながら、社会を支える一員として一歩ずつ進んでいきたい。